

「ウィーンの花」5月10日号で「チェルノブイリ事故20年に想う」と題する記事を掲載して頂いたが、10月にチェルノブイリ原子力発電所を訪問する機会があったので、現地の状況についてご報告します。

10月9日(月)早朝、発電所の車でキエフから約120km 先のチェルノブイリに向かう。約1時間半後、立ち入り禁止の30km ゾーン入口の検問に並ぶ。ゾーン内には環境モニターなどに従事する技術者らがいて、キエフから月曜朝から木曜夕方まで「木帰月来」で通勤する人も多いとか。

発電所に到着後、案内された展示建物から、事故を起こした4号機を覆う巨大な石棺が窓ガラス正面に見える。これが世界を震撼せしめたあのチェルノブイリかとはしばし感じ入って眺めた。ビデオ、石棺の模型、パネル等に基づき説明を受ける。ビデオでは、日本でも放送された有名なシーンもあるが、当時の生々しい状況と困難に勇敢に立ち向かう人々の姿に改めて感銘を受けた。事故状況についていくつか質問したが、従来以上の情報は得られず。3名の説明担当者はいずれも事故後に発電所に赴任したとのこと、20年の歳月を感じさせた。石棺は震度4の地震で崩壊すると評価されており、それを避けるため、コンクリートの注入など構造安定化の作業が進められている。構造物の老朽化、雨水の浸入等が問題となり、新シェルター建設計画が進められている。29ヶ国が中心となって欧州復興開発銀行に石棺基金が設立され、合計11億ドルを拠出。我が国からは5,500万ドルを拠出している。



チェルノブイリ4号機石棺の前



30キロメートルゾーン入り口の検問

発電所は2000年12月までの1～3号機の閉鎖以来発電は行っていないが、上述の作業の他、使用済燃料のための新しい燃料貯蔵施設の建設、1～3号機の施設の廃止措置計画、運転や事故で発生した廃棄物の処理処分のための作業や施設建設も進めている。事故後発電所から約60kmに新しく造成されたスラブチッチ市には、約3,000名の発電所職員と家族のほとんどが居住している。現場で働く多くの職員は、真摯に仕事に当たっているが、国際協力が進められている新シェルター計画等では、外国への技術依存、スケジュールの遅れなど今後解決すべき課題も多いと感じた。

面会した約10名の部次長クラスの約半数からしか名刺をもらえず不思議に思っていたら、発電所の通訳によれば、組織変更がしばしばあるので、名刺を持たない人も少なくないとか。ロシアへのエネルギーの過度な依存を避けるため、ウクライナでの新原子力発電所建設を熱く語る専門家もいたし、昼食をとったカフェテリアでは比較的若い職員が多く、全体に予想より活気を感じた。今回、現地を訪問して専門家との意見交換や情報収集が出来たのは有意義であり、今後もフォローが必要と感じた。なお、30km ゾーンを出る時に放射能を詳細にチェックしたが被ばくはゼロであったことを付記する。

余談であるが、所長室がある管理棟の会議室に向かう階段の最後でつまずき、カバンを投げ出す程派手に転倒した。1986年4月の事故時には原子力安全委員会事務局メンバーとして事故対応や事故調査特別委員会の仕事に追われた私も20年の歳月を経てそろそろ年かなと悲嘆に暮れそうになった。すると「ここでしばしば転倒がある」と女性通訳が意外なことを言う。階段をよく見ると最後の段だけ5cm程高くなっている。下を見ないで階段を上った私も不注意だったが、このような設計・施工ミスや転倒者が続出しても長年放置しておくことにも事故の遠因があったのではないかと、痛い足をさすりながらふと考えた。

〈広報部より〉 次号(11月30日発行)の原稿締めきりは、**11月20日(月) 13:00**です。

なお、投稿文は紙面の関係上、多少変更させて頂くこともありますのであらかじめご了承下さい。